

## 日本語史における漢語研究の視点と方法

張, 愚

<https://hdl.handle.net/2324/1866238>

---

出版情報：九州大学, 2017, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	張 愚				
論文名	日本語史における漢語研究の視点と方法				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	高山 倫明	
	副査	九州大学	教授	辛島 正雄	
	副査	九州大学	准教授	青木 博史	
	副査	九州大学	准教授	川平 敏文	
	副査	東京大学	教授	久保 智之	

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、「無心」「等」「無慙」「迷惑」といった漢語語彙を取り上げ、その出自・語源の実証的な考察を踏まえたうえで、漢語の語義変化とその文成分や品詞変化との相関を明らかにし、漢語研究の新たな視点と方法を提案するものである。構成は、まず序章において研究史を整理し、その問題点を指摘するとともに、本論文の目的・方法を説明、次いで、第2章から第7章にかけて具体的な事例による検討を展開し、第8章で全体の総括を行っている。

第2章「漢語の語源研究に関する一試論—「無心」を例として—」では、漢語「無心」の多義性に、中国語出自の漢語と和語「こころなし」に由来する和製漢語の両方が複雑に関与していることを明らかにする。併せて、漢語語源の認定方法を検討し、漢字文字列と語義のみを手掛かりとすることの限界を指摘しつつ、音訓と漢字表記における意味上の共通性に着目して語の成立過程を探る方法を提案している。

第3章「漢字の音訓の違いによる意味上の使い分け—評価的意味を表す漢語複数接尾語「～等」を例として—」では、漢語複数接尾辞「等」を取り上げ、その音訓の相違で上接語に異なる評価的意味を付加している実態を、特に中世語の諸資料を駆使して明らかにしている。

第4章「日本漢語の品詞性をめぐる諸問題—漢語は本当に名詞として受容されたのか—」は、日本語史における漢語の品詞性について再検討を試みたものである。漢語は体言（殊に名詞）として日本語に受容されたとの見方が一般的であるが、その背後にある理論的基盤を批判的に分析し、原語の品詞性を一定程度保持しつつ受容された可能性を指摘する。併せて、語の形態的・統語的特徴と意味の面から総合的に吟味し、受容と変容を連続的に捉えることの重要性を論じた。

第5章「漢語の文中での統語的機能の変化と意味変化の相関関係—「むざん（無慙）」を例として—」及び第6章「漢語の品詞性と意味変化の相関関係—「迷惑」を例として—」では、従来比較的手薄だった漢語の語義変化とその文法的機能の変化との相関を論じたものである。「むざん（無慙／無慚／無残／無惨）」は文成分の変化と連動して語義も変化した好例で、同じ形容詞的用法であっても、叙述・規定・連用修飾等、文中で異なる成分を担うことによって、その意味が異なってくることを指摘した。一方、異なる品詞で用いられることによって、語の意味が変化する典型例として「迷惑」を取り上げ、初期訓点資料や古記録・古文書において第三者の感情を描写する動詞用法として多用されていたものが、中世前期およびそれ以降、書き手・話者などの一人称の感情を表す形容詞述語文としても用いられるようになったことを明らかにした。

第7章「類義語との関係性からみた漢語の語義変化—漢語「迷惑」とその周辺—」は、他の和語との関連性からみた漢語の語義変化を論じたものである。「迷惑」の周辺に見られる和語「まよふ」「まどふ」の使用様態に注目し、その語義変化との相関関係を論証した。

全体を統括する理論の構築には未だしの感が否めず、さらなる検討を要するが、上代から近現代に至るまでの膨大な資料、殊に訓点資料、古記録・古文書を駆使した文献学的な実証手法は手堅く、漢語の通時的研究に対して積極的な意義を持っていると判断される。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。